

〔「法学新報」第26巻1(293)号 大正5年1月1日〕

○商科学生の修学旅行 肥馬天空に嘶きて我等か旅情をそそること頻りなり茲に我商科学生二十余名は福島新潟長野地方の商工業を視察せんとし大正四年十月二十九日より四日間の予定にて旅途に上る山には楓樹の紅を装ふあり野には菊花の繚乱たるありて我を迎ふに似たり午後八時十五分上野駅を発す一行は太田講師及び山本氏を始めとして二十七名なり前日来急に寒冷を覚え加ふるに車中には未だ「スチーム」を通せざるを以て安眠し得ざる程の寒さなれとも一行の気焰虹の如く且談し且吟す滑稽は諧謔となり諧謔は笑声に笑声は歓声と変して霜枯れ行く北国へ独り淋しく旅する人の夢驚かしたることも幾度そ夜の暗を縫ひて走る汽車の何所を走るとも分らねとさすかに大宮小山宇都宮郡山等の名邑は窓外に呼ぶ馭夫の声にて知られたり秋の夜長も興し合へる我にはさまで長くも覚えす明くれは三十日午前五時を過ぐる十分若松駅に下車す朝食を待合室に認めて直に飯盛山の白虎隊の昔を弔ふへく出て立つ路上置く霜のいとと白く磐梯下しの肌に染むあれとも長夜の疲労更に無く意気冲天の概あり山麓より坂路を上ること寸時左甚五郎の設計になりしと呼ぶ「さざえ塔」へ辿り著く塔内に本朝二十四孝の遍額あり形状ささゑに似て極めて奇なり此塔の右手に白虎隊二十勇士の木

像を安置す尚ほ登りて墓碑並自刃の場所に到る香煙縷縷たる墓前老松鬱蒼たる自刃の遺跡往時を追憶し来れば感慨無量なり茶店男の素朴なる昔譚に興趣何時果つへくとも見えざりしか強て訣を分ちて下山す県立若松工業学校に到る恰も創立二十五週年記念の展覧会開催中にて教員某氏の懇切なる案内に依り陶器部染色部機械部漆工部等を巡覽せり最も興深かりしは堆積せる陶土か忽に皿状又は茶碗状となる陶器製造の第一階梯にして其入神業なるに魅せられたり「ロクロ」は手動式の物を使用し居り生徒の製作に係る会津塗の盆菓子器巻煙草入等は東京の市価の約半価なるに一驚を喫す十時校を辞して会津城趾を訪ふ唯見る巨石にて成れる石廓は美しく彩られたる鳶葛のはふに委せ古松濠水に其影を浸す先の飯盛山は紫に煙り樹間に松風の調ありて又新なる懐古の涙を誘はしむ市街の建築粗雑にして一見人口四万を有する旧会津城下とも覚えす商業も亦不活発なるもの如し十一時此地を發し新潟に向ふ木曾路にもいや勝ると謡はるる美しき紅葉の山間を青藍を溶かしたる如き流れに沿ふて我汽車は新潟へ新潟へと走る疲るれは名みの停車場に寸時の憩をとりにて又走る倦かぬ眺めの尽くる所は即ち越後平野なり噴油に名たたる新津もいつか過ぎて午後四時十三分新潟に安著す學員弁護士松木渡辺両氏の歓迎を受け言ひ知れぬ懐しみを覚えたり之より先「ランニング」の寺島選手か沼垂駅より御得意の章駄天に一行の度胆を抜きたる珍談もあり信濃川に架せる四百五十間の万代橋を渡り小甚旅館に宿る両學員の尽力に依り頗るの優遇をうけ前夜来の疲労に夕暮より降り出したる雨の音を聞きつ

つ円かなる夢を結ひぬ「ベッド」を蹴て起出つれば十月三十一日の空雨止みて晴模様なり元氣百倍す今日は畏くも天長の佳節なり階上階下に於て国歌を合唱し遙に旅の空より君の万歳を三唱す午前九時前日の如く松木渡辺両氏の案内を乞ひ物産陳列館を見る本館別館共簡単に一巡し名物初雪たまたれ等雜囊に収め其より医専師範学校前を経て万代橋畔より曳船に依り信濃川の河口近く遙に日本海の白波を望み沼垂なる宝田石油会社製油所に向ふ某技手の案内にて工場内を隈なく巡覽す（宝田石油会社沼垂製油所見聞）沼垂駅にあり信濃川の河口に沿ひたり主として新津の原油を採りて精製す新津の原油は重油分に富み灯油分に欠くを以て之より燃料用の重油並揮発油を取る（一）荷造場、機械小規模にして人工を以て量り之を鑪に入る（二）「タンク」、五百石入の「タンク」にして河岸に沿ひ直に「チューブ」を以て船に積込むの設備を有す（三）「ボイラー」、重油を噴出せしめ蒸氣機関を動かし各種の「ポンプ」に利用す（四）機関室、「エンジン」及「エアークンプレキサー」あり氣體を以て石油を攪拌するに用ゆ（五）蒸溜鑪、平釜を用彙る石油、「ピッチ」を燃料とす（六）「コンデンサー」、平釜の上部より「パイプ」を以て揮発分を水中に導き凝固せしむ（七）「垂れ場」、「コンデンサー」より「パイプ」を以て茲に來らしめ一部に硝子窓を設け色合を計り時時汲み取り「ボーマ」等を検し之を各別の「タンク」に輸送す（八）「アジテーター」、極て旧式にして硫酸洗と曹達洗を上下別別の「タンク」にて行ふ今日にては大部分空気攪拌とす（九）更に外箱の「プリント」を見る（十）又

極めて旧式の手にて硫酸洗を為すことあり正午十二時沼垂駅より松木渡辺両氏の厚遇に對し厚く感謝の意を表し名残惜しき北国の都に訣別して帰路の旅に著く汽車弁は新津にて認めたり此日旅程を変更し長岡に下車することを止めて柏崎より北越の私線に依りて西山迄逆行し油井の視察を試むることと為れり即ち午後三時二十分柏崎へ同四時二十八分西山へ著す途中の風物に往路岩越線の奇なし唯除雪用に設けられたる材木にて成る「タネル」様の奇異に感したるのみ汽車の走る所は越後平野なり薄暮近く西山の山腹に櫓の林立するを見る宝田石油の採油所を視察す櫓數約二十箇所担当技師に就き「ロータリー」式の鑿井機を見る中八吋位の□形の錐を有する鉄管を旋廻しつつ掘進するなり次に目下汲取中のものを見るに「ポンプ」を地方四百尺に下し汲取るなり西山の石油坑は瓦斯に富むを以て瓦斯は「ポンプ」の管の外面に沿ひて上進し之を以て最近「ガソリン」を作るに至れり又此地より柏崎迄約三里の間を地底の鉄管に依り送るべく完全なる「ポンプ」あり薄暗き北国の車中に北国の方言を聞き寒さと空腹に怯へつつ六時四十三分再び柏崎駅に下車し防寒待合室にて熱き渋茶を啜り天京旅館の弁当に舌鼓す信濃川の生鮭も度重なりてはいささか鼻につき気味なり七時半新潟より來れる「ボギー」車を待ち兼ねて乗車す往路十年の知己となれる車掌君の厚意にて「スチーム」の通せる暖き車に歓談しつつ九時前十分直江津へ安著駅前のいか屋旅館支店に宿る途中青海川鉢崎湯町等の小駅を通過する間線路脇に設けられたる防波堤へ日本海の怒濤か雪と散る奇觀夜の旅なるを染染悲しみぬ

此夜茶話会を開く一杯の洪茶一塊のせんべいも我等か友情を暖むへき山海の珍珠なり滑稽の親玉寺島君の浪花節講談等ありて満場の喝采湧くか如く全く会を徹せし時一日午前一時を告げたり十一月一日午前八時起床茲より約半里を距つる日本石油会社直江津製油所を視察す三十分にて三十万坪の大工場を見るにより粗雑なり一般に宝田石油会社よりも極めて完備し鐘「コンデンスー」其他大規模なり(一)先つ試験室に入り引火点色合比重等により品位を定むるを見る(二)灯油、軽油、揮発油の精製場を見又(三)重油の製造所を見る(四)「ブリキ」鐘の製造所を見るに総て機械力を応用し分業を以て「ハンダ」著に至る迄機械力に依る(五)充填所を見るに一回に十二鐘宛並置し機械を以て分量を量りて充填す(六)大正二年度新設の「パラフィン」蠟製造場を見る此附近産出のものには蠟分を含むこと多きを以て冷却法を用ゐて之を取る本邦に於ける最初の企なり、直江津名物に翁飴笹飴等あり十一時半此地を發し正午十二時前高田著直ちに東洋「プレート」会社へ向ふ恰も定期休業日なりしかとも社員の案内にて「プレート」機、織機の充滿せる貧弱なる木造の工場に入り該機械の説明並我國に於ける「プレート」製造の沿革等を聞き「プレート」応用の製品等を示されたり其より高田城趾の外廓を巡りて郊外の秋を探り富山織物模範工場に至れば休日故を以て内部の觀覽を謝絶せられ止むなく発車時間迄市中の自由散歩を許さる雪<sup>ツ</sup>江りを防ぐ屋根の装置軒伝ひに通行し得る人道等皆北の国の香りして店頭接客振り何れも「グルーミー」なり名物に笹飴、ありの味等あり、あり

の味は新潟に比して二割方高価笹飴は名物の類に洩れぬ代物なり午後二時半高田を後にして南へ南へと走る汽車の窓より山国の秋を愛てつつ何時か柏原駅を過ぎ越の国より信濃の国に入り六時長野駅に車を捨つ道幅狭けれと何となく暖国の臭ある股賑の市中を縫ひて三三伍伍連れ立ちて善光寺に詣る山門の壯觀堂宇の廣大浅草觀世音のそれにも勝り流石幾百万の善男善女の集ひ来る名利とは知られたり山門前は仲店に似たる華やかなる小店軒を連れ其売る所のものは多く名物あらず、干しあらず、羊羹、林檎等なり更科蕎麦を呼んで空腹を医するに醬汁の旨味は遠く東都のそれに及はず漸く二碗を傾けたるのみ十一時五十分發す連夜の睡眠不足にて一行に前の英気なく夜の暗を破りて進む車輪の猛烈なる子守唄を聞き「ボギー」車の揺籃<sup>カ</sup>にゆられて睡りに落つ過ぎにし旅のことも夢幻となりて脳裏に徂徠す關に上田輕井沢高崎熊谷等を過ぎて我夢の尽くる所は即ち上野駅なり時に二日午前七時商科の万歳を三唱し斯くて五日間の旅を終る(一行の一人K生投)